
魔幽

吉野桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔幽

【Nコード】

N3850L

【作者名】

吉野桜

【あらすじ】

私立聖華女子大付属学園に通う少女、伊集院マユと上原綾は毎度綾の父親の収集癖が招くトラブルに巻き込まれてしまう。

今回はフランスで買い付けてきたアンティークドールが原因でやっかいなことになったと、マユは上原宅へ呼び出される。

血塗られたドールの悲しみをマユは沈めることが出来るのだろうか。

?

「だから、今夜マユに来て欲しいのです」

長い綺麗な黒髪の少女が上目使いに長身の親友を見上げる。

「で、今回は何？」

見上げられた方はだいたいの事情は聞かずとも察した様子で盛大なため息をついた。

私立聖華女子大付属中等部の第二校舎の2階渡り廊下、伊集院マユとその親友上原綾は校内放送で呼び出され、一週間後に控えた夏休みのありがたい宿題を頂きに行っている最中だった。

高等部と中等部の職員室は共同で高等部の生徒が職員室へ行くには中等部のこの第二校舎を通りぬけるのが一番早いのだが。

「見て見て！ マユ様と綾様よ！ 二人で歩いているとまるで絵に描いたようにキレイね」

「ほんと、マユ様見ると世の男なんてもう目に入らなくなってしまいうわ。お二人そろって中等部をお通りになるなんて、今日はなんて運がいいのかしら」

とまあ、あちこちから中等部の少女たちの感嘆のため息がこぼれまくってうるさいのなんの。

伊集院マユ、高等部2年。母方の祖父がロシア人である彼女はその血を濃く受け継いでいて、肌は日本人にはない白さを持ち、瞳はブルーグレー、髪は薄いブラウンの猫毛をやや短く切り、身長百七十八センチという女性にしては大柄な体格のわりに少年のようなスラッとした体躯をしていてごつい印象はまったくなかった。

彼女は小等部から聖華の人気ナンバーワンの地位を誰にも譲ることなく現在までやってきた。

一方、上原綾も同じく小等部から聖華でマユと人気を二分する、

こちらにも稀な美少女だった。

マユと違いこちらは日本人形のような美しさを持つ少女で、腰まで続く黒髪は鴉の濡れ羽色、切れ長の目元にふっくらした桜色の唇。物腰もとやかでマユとはまた違う色白な肌をしていた。

ふたりとも濃紺で統一された詰め襟の半袖シャツにプリーツスカートという聖華の制服がストイックな感じでよく似合っていた。

「で、今度はオヤジさん何買ってきたんだ？」

長身の美少女はげんなりとした声で綾へ尋ねながら職員室へ一礼して入っていった。続いて綾も一礼して入る。

「何もそんな言い方しなくても。確かにお父様は懲りないというか頭が悪いというか」

綾が歯切れ悪くそう言っていると、

「マユさん、綾さん、こっちです」

女子校には珍しく若い眼鏡の青年教師が手招きする。

栗色の髪の毛に色の白い華奢な感じの青年だ。

「ユウキ、綾は委員長だからわかるが何故飼育委員の私まで校内放送でわざわざ呼ぶのだ」

教師に向かって不遜な態度をとるマユにユウキの近くに座る学年主任のシスターが咳払いをしてたしなめる。

「学校ではユウキって呼ぶなって言ってるだろ。それにせめてお兄様と呼べんのか？」

ボソボソと小声でマユを睨んでユウキは小さくため息をつく。

「なんだよ、お家事を私におしつけてさっさと家出ていったと思ったら私の学校に赴任なんかしてきやがって、このウスラバカが！」

綺麗な顔からはあまり想像したくない柄の悪さでマユはケツと横を向く。

「あはは。それを言われるいたいなあ」

伊集院ユウキは後ろ頭をポリポリとかいて苦笑いをこぼした。

よく見ると眼鏡の奥の青年の瞳はマユと同じブルーグレーの色を

している。

「で、伊集院先生、ご用件は夏休みの課題だけでしょうか？」

綾は小首をかしげてユウキに尋ねる。

とたんにユウキが真っ赤な顔でまくしたてる。

「いや、本当は課題なんてうちのマユさんに持って行かせたらいい問題で、綾さんに来ていただくほどのことでもなかったんですが、ただ昨夜綾さんのお父様に頼まれたことをマユさんに伝えておきたかったんですが、だから、あの、その、あは、あははは、は」

「バカが……」

マユがボソリと呟いた。

兄の用件も綾の用件も結局のところ同じであった。

綾の父、上原秀豊がまた海外出張の時にアンティーク収集病にかかって買ってきた何かの問題ありだったのでみて欲しいというのだ。綾の父とマユの父は従兄弟同士で仲もよく、秀豊のところでは何かあるごとに伊集院家退魔若頭のマユを引っ張り出して解決させようとするのだ。

マユが毎度いくら拒否しても「これも修行だ！」の一点張りの父。もはや反論するのも疲れたマユは仕方なくこうして今夜も上原の豪邸へ足を運ぶのだった。

？（後書き）

古い作品ですが、記載作品が少ないので載せようと思います。

完結作品なので、連載が「灰都」のように止まることはありません；
；；

全4回での掲載となります。

この作品は兄バージョンの話も考えていて、とん挫したままになっているので、兄バージョンもいつか書きたいなあと思っています。

？
(前書き)

?

迷彩柄のピッタリしたキャミソールに濃い水色のジーンズ。赤いスニーカーはコーラの懸賞に出しまくってなんとか手に入れた自慢の一品で、マユの一番のお気に入りである。

手足のやたら長いマユは胸のふくらみがなければまぎれもない美少年に見える。

夜も更けた二十三時。マユはどうしても連れて行ってくれときかない兄とともに上原邸の門の前に立っていた。

監視カメラに向かってマユは仁王立ちすると、

「おいオヤジさん！ 厭々きてやったぞ！ さっさと開けろ！」と叫んだ。

「お、お、おい！ マユさん、何もそんなに偉そうにしなくても」慌てた兄はびしっとスーツ姿だがマユと並ぶとどこことなく頼りなく見えた。

程なくして綾本人が出てきた。

やはり日本美人な綾だけに着物姿で出てこられると見慣れたマユでも一瞬見惚れてしまった。

「ごめんね、マユ。毎回同じことで呼んでしまった」

綾が申し訳なさそうに俯く。

「イヤ、綾が悪いんじゃないよ、問題はあのバカオヤジだろ？」

優しく語りかけ、綾の頭をポンと軽くたたいてニヤリと不敵に笑う。マユのお得意の表情だ。

「ありがとう、マユ」

綾が清涼感いっぱいに微笑むとマユの後ろに立っていたユウキが盛大に鼻血を噴いた。

「まあ、大変！」

綾が袂から金魚の刺繍の入った薄桃色のハンカチを取り出しユウキに駆け寄ると、更に眩暈を起こしたユウキだった。

マユが首を左右にふり大きなため息をついた。

「バカが・・・・・・・・」

「いああ、毎度毎度すまないねえ、マユ君」

「すまない」なんてこれっぽっちも思っていない様子でリビングに現れたのは諸悪の根源、上原秀豊だった。

上原財閥に婿にきた彼は臆することなくいつも自信満々に生きている。そしてその自信は決してまがいものではなく、彼が上原へ婿へきてから財閥は飛躍的に拡大した。

綾の母、百合子も大変綺麗な女性なのだが、実は綾の美貌はこの父から受け継いでいて、秀豊は四十半ばというわりに綾の兄といっても不思議でない若さを持っていた。

「ほんと、毎度毎度学習能力のないオヤジだな。少しは綾を見習えよ」

容赦なく言われた秀豊だが一向に懲りた様子も落ち込む様子も怒った様子もなく、

「実はコレなんだが」

と、全くもって自分のペースでいきなり本題に入っていた。いつものことなのでマユも綾も今更腹も立たない。

マユがそれを見て眉をしかめる。

「フランスの市で安く購入できたんだが、どうもこれを持ち帰ってから寝つきが悪くて」

秀豊が「わはは」と後ろ頭をパシパシたたき、説明する。

青い目で金髪、深紅のドレスを来たアンティークドール。

「オヤジさん。よくコレ買う気になったな」

マユが半ば関心した様子で人形を手取る。

「というか、腐っても伊集院の血を引いてるだけあるな、寝付けな程度ですんでるんだから。ああ、だから今日は綾が門を開けにきたんだな」

納得したように頷くマユに綾も頷く。

いつもなら門の監視カメラにマユが映ると躰の行き届いたメイドがすっ飛んでくるのだ。

「そうなの。この人形が来てからメイドさんが次々事故やら病氣やらでお暇をあげなくちゃならなくなって。一週間で気がつけば私とお父様だけ」

「百合子さんは？」

「お父様がまた変なもの買ってきたから怒って伊豆の別荘へ行ってしまったわ」

綾が珍しく少しすねた口調で言った。

「なるほど」

マユがしっかりと頷く。

娘にまで遠まわしに非難されてさすがに少ししゅんとなる秀豊であった。

「ユウキ。おまえ曲がりなりにも伊集院家長男だろ？　これから何か感じるか？」

これはマユなりのユウキへの意地悪だった。

彼が家を出た最大の理由は、彼は退魔の家に生まれておきながらお化けの類が大の苦手なのだった。

しかし、不運にも血筋のおかげで彼にも靈感はたっぷりあった。

「う、う、うわぁ、こっちに持ってこないでくれ！」

「あゝあ、そんなじゃ綾、幻滅するぞ〜」

妹のその一言に兄は涙目で姿勢を正す。

マユが意地悪成功に死角でクスツと笑う。

「で、この人形いったい何があるんだ？」

秀豊がしびれをきらして尋ねるとマユがニヤリと微笑んだ。

「これ、血の匂いしかしませんよ」

「ユウキ、さっき買ったミネラルウォーター」

マユが隣に座る兄に人形から視線をはずさず手を差し出す。

「あ、あぁ」

ここへくる途中にコンビニで買ったまだ冷たいミネラルウォーターのボトルを手渡しながらユウキは不思議そうに尋ねた。

「マユさん、それどうするの？」

マユの手がしばし止まり、信じられないものを見る目つきで兄を見た。

「ユウキ、おまえホントに伊集院家の人間か？」

ユウキが焦り顔で少し引く。

「な、なんだよ。仕方ないだろ。僕は全くもって修行さぼってたんだから」

そんなこと声を大にして自慢しなくても、とマユが小さくため息をつく。

「バカが……。これは清め水の代わりに使うんだ。そうしてこの人形の本体を表に引きずり出してやるんだ」

「本体？」

マユは兄の質問攻めにしばし沈黙し、兄をキッと睨んだ。

「うるさいユウキ！ 少し黙ってろよ」

妹に一喝されてしゅんとなる兄ユウキを見て綾はクスクスと笑った。笑われた兄ユウキは顔を真っ赤にしてソファで小さくなった。

マユはいつも持ち歩いている紫水晶の細い数珠をジーンズのポケットからジャラリと取り出した。

姿勢を正す。

呪文を唱えかけ、ふと手を止め隣の兄を見た。

「さっきは言い方がきつかったな、ごめんなユウキ。ユウキは綾とおヤジさんつれて外で待っててくれないか？」

「マ、マユさん……。…」

ユウキの顔がパアッと晴れる。

「早くしろ。怖いことになるぞ」

マユが意地悪く微笑むとユウキが慌てて席を立った。

「綾さん、お父様、は、は早く部屋を出ましょう」

手と足を同時に出し、青くなったり赤くなったりしながらユウキ

は綾と秀豊を促し部屋を退出した。

「さて、と」

マユはドールに冷たく微笑んだ。

?

マユがボトルの蓋を開け、先ほど唱えかけた呪文を唱えなおしながらドールの白い額に数滴水をたらした。するとドールはカタカタを震えだし、風のない室内でカーテンがふわりと揺れた。それを境にグラスの入った棚や部屋の家具がいつせいに騒ぎ出した。

「おいおい、モノは壊さないでよ、人形さん。あんたは誰なんだい？」

暴れる人形に封じの呪縛をかけ、マユは尋ねる。

マユの問いかけに何やら反応したらしく人形の動くはずのない口が滑らかに動き言葉を発した。

「***+~○▽◎□*#\$\$\$\$」

「はあああああ、・・・・・・やっぱり」

マユが大きくため息をついた。

「このあいだは中国語でその前はドイツ語だっけ・・・・・・で、今回はフランス語かよ」

遠い目をしてそう呟く。

「仕方ない、今回も直接対話は断念して飛びますか」
気を取り直してドールに視線を落とす。

「あんたの言い分聞いてやろうじゃないの」

ブルーグレーの瞳をゆっくり閉じ、マユはドールの精神世界へ意識を飛ばした。

「ママ、いたいよ、やめて、ごめんなさい、ごめんなさい、ぶたないでえ」

子供の悲鳴と棒で体を叩く鈍い音。

精神世界には何語もないのでマユの耳には彼女たちの言葉が日本語として聞き取れる。

「おまえって子は、おまえって子は、おまえって子はっ！」

鈍い音を響かせながら母が娘を殴る。

「ママ、ママ、ママ、もうききません、いいません、ゆるしてゆるして！　ぶたないで！　おねがい、いたいよ、ママ！　いたっ！」

金髪の十才くらいの女の子がお腹のあたりをかかえながら母の暴力を無力に受け止めていた。

「なんて子、なんて子。私が悪いとでも言うの？　あの人が出て行ったのは私のせいじゃないのに！　パパは帰ってくるの？　ですって！　どれだけ私を傷つけたらいいの！」

「ギャッ。いたい！　ママやめて、やめて」

うずくまる娘を足で何度も踏みつけ、母は髪を振り乱し力の限り子供の背を叩きつづけた。

いったいあの小さな背にどれほどの罪があって傷を負わされるのだろうか。

場面が飛んだ。

暖炉に火がくべられた室内。あたりの雰囲気はとても穏やかだ。

「パパ！　おかえりなさい」

木製のドアが開き隙間風に父の帰りを待ちわびていた少女は少し震える。しかしすぐにまた暖かい空気につつまれ安心した少女は父に駆けより飛びついた。父は片手で娘を受けとめた。

「ああ、愛しいミシエル。いい子にしてたかい？」

金髪の少女はとびきりの笑顔で大きく頷く。

父は背中に隠していた包みを少女の目の前に差し出した。

少女の青い瞳が感激に大きく開く。

「お誕生日おめでとう、ミシエル」

「わあ、ありがとう、パパ！　開けてもいい？」

包みの中からは金髪で青い目、深紅のドレスを着たドールが出てきた。

「ミシエルにとってもよく似た可愛いドールだろう？」

「わあわあ、ありがとうパパ。私この子のこと大事にするわ。うんと、大事にするわ。名前は、そうね……ベル！　ベルと呼ぶわ。よろしくね、ベル」

場面が痛ましいシーンに引き戻された。

母は暴力を振るい疲れてベッドで眠っていた。

そのベッドの下で冷たい床の上で、少女はぐったりと横たわっていた。口元には嘔吐の後があった。

少女は愛らしかったであろう顔を紫色に腫らして、お腹で守っていたドールの冷たい手を握り弱々しく大切なドールに話しかける。

「ベル、ミシェルね、パパのこと大好きだったの。ママのこともね、大好きなのよ。でもね……ママはミシエルのこと大嫌いないの。だって、いっぱいいっぱいぶつんだもん……」

腫れて細くなった青い瞳から少女は床にぽたぽたと涙をこぼした。

「どうして、ミシエル生まれて、きたん、だろうね。パパに……
・会いたい、なあ……
・パ、パ、パパ」

涙はとめどなくあふれ、晴れ上がった少女の頬を優しく冷やした。そして、次第にドールの手を握る少女の力が薄れていく。

「べ、ルは、怪我、しなかつ、た？」

そう最後に呟き、少女の口元が少しでも微笑みの形を示したかと思うとそのまま少女は息を引き取った。

背骨も頭蓋骨も砕けていた。

痛みと悲しみの中、少女は死んでいった。

ドールはしばらく動かなかった。

動かなくなった少女を見つめてその姿をガラスの青い瞳に映していた。

そうしているうちにドールに自我が生まれた。

そしてドールの生まれたばかりの心は憎悪で満たされたのだ。

許さない！

初めて動かす手足は重く痛かった。

しかしドールはカタコトとゆっくり歩いてみる。

歩けることを確認するとあたりを不器用に見渡し、あるものを発見する。

ドールはテーブルに近づき腐りかけた林檎の傍にある錆びたナイフを手を取った。

振り向いて少女の母を睨みつけ、そうしているうちに自分が宙に浮いていることに気が付いた。

ドールは母の元へ行き、そしてまず、女の腕を刺した。

「ぎゃあああ！」

悲鳴が上がった。

ドールはその悲鳴が何より嬉しかった。

足を、腹を胸を額を。

女が動かなくなってもドールは女の体中を刺し続けた。

マユはゆっくりと瞳を開いた。

右手で押さえつけているドールを見るとその顔は愛らしさの欠片もなく、憎しみに歪んでいた。

ドールから伝わる思いはひとつ。

——許さない！——

「おまえ、つらかったんだな」

マユはそう呟き、再び瞼を閉じた。

「迷える魂魄よ、このヒトカタをすぐえる唯一の汝、我の真名魔幽の名のもとに現れよ。我の魂魄に宿れ、ミシエル！」

マユの瞼がパチリと開く。その表情は随分と幼いものになっていた。

『ベル！』

マユの体を借りている少女は泣きそうな声でそう叫び、恐ろしい形相のドールをいとおしそうに抱きしめた。

『ごめんね、ベル。ごめんね、ひとりぼっちにしてごめんね。ミシエルもうだいじょうぶだよ。だからいっしょにいこう。ありがとね、ベル。ミシエルのこと愛してくれてありがとう。ミシエル、ベルのこと大好きだよ』

ドールの表情が和らぎ、ガラスの青い瞳から一滴の涙をこぼして、人形は本来の無表情に戻った。

「マユ、大丈夫かしら」

綾が心配そうにリビングの扉を見つめる。

「マユさんなら大丈夫ですよ。なんてったって、伊集院家の優秀な跡取ですから」

イヤミでなく自慢気にそう言う伊集院家長男に綾の心が安らぐ。

秀豊は秘書からの緊急の電話で慌しく京都へ出かけて行き、いなかった。

ユウキは綾とふたりきりにされて緊張のためどれほどの時間が経過したのかわからなかった。綾をちらりちらちと見ると、彼女は心配そうにリビングの扉を見つめていた。

偶然同時にため息を吐き出したとき、リビングの扉がゆっくりと開いた。そして伊集院家退魔若頭、伊集院マユが少し目の淵を赤くして問題のドールを抱えて出てきた。

マユは待っていた二人を見て、ブルーグレーの瞳を細めて不敵に微笑んだ。

「これはもうただのフランス人形だよ」

最終回

うっとおしく蝉が鳴いている。

体育館を出てくる生徒たちは暑さにめげず元気だ。

なにせ明日から夏休みだから。

「はあああ、にしても終業式ってうっとおしいよな。シスターの話長いし」

マユがあくびをしながら綾に言う。

このツーショットの周りはいつも騒がしい。あちこちから「綾様よ」「マユ様にしばらく会えないなんて」とささやきがもれる。が、
とうの二人はそんなことまったく気にしていない。

特に今日の綾は少しふさがちで周りのことはまったく目に入っていない様子だ。

「今年の夏休みはどこに遊びに行く？ 海に行く？ 山にキャンプでもいいなあ」

呑気に夏休みの計画を提案するマユに綾が更に暗い顔をする。

「あの・・・マユ」

綾はマユを見上げ、そして言いくそうに俯いた。

マユが嫌な予感にハッとする。

「ま、まさか」

「お父様が京都でまた変なもの買ってきてしまった」

かわいらしい顔で上目使いに言われてもユウキならともかく、マユにはただの困っている親友の顔だ。

「どああああ！ あんのクソオヤジイイ！」

長身の美少女の雄たけびが聖華校内に響きわたったのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3850/>

魔幽

2010年10月8日12時44分発行